

質的調査研究の “質”を問い直す

いま質的調査研究への要請が高まっている。おそらくは統計的手法を用いた量的調査では把握できない多様な社会問題や社会現象が現代をおおっているからだろう。そうした問題や現象を生きる人々の意味にまずはなんとかして近づきたいという欲望は社会を研究する者にとって自然なものだろう。そして最近、質的調査研究をめぐるテキストや概説書が盛んに出されている。そこでの説明の多くは質的調査技法の「マニュアル」とでもいえるものだ。あたかも家元のごとくに自らが考案した技法のマニュアル本が重ねられている場合もある。たしかに初学者にとって「マニュアル」本は便利なのかもしれない。だが、はたしてそうした傾向は質的調査研究の“質”を向上させ、それをより鋭利な見方や技法として洗練させるうえで好ましいものなのだろうか。本特集では、ライフストーリー、相互行為分析（エスノメソドロジー）、言説分析で、堅実な成果を重ねてこられた3名の先生にお願いし、いま問題だと感じられているところを自由に論じてもらった。各論考を読めば、質的調査研究をめぐる知的刺激がおおいにかき立てられることと思う。まずは3名の先生に感謝したい。

（好井裕明・米村千代）





いま、あらためて“声”と向きあう



1 方法論の展開

近年、質的なインタビュー調査に関する方法論を牽引してきたのはおもにライフストーリーの研究者たちであった。彼らは、ライフストーリー法においてライフストーリー・インタビューが非常に重要な位置をしめることを指摘し、インタビューの場とそこで産出される語りを詳細に吟味する方法論を展開してきた。つまり、ライフストーリーの語りが、語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビューの場に持ち出されたものではなく、語り手と聞き手とのコミュニケーションという相互行為を通して共同的に構築されるものであるとする見方を提唱してきたのである（桜井，2002；桜井・小林編，2005；ホルスタイン・グブリアム，2004）。桜井厚は、ライフストーリー研究におけるこのようなアプローチをさして対話的構築主義アプローチと呼んでいる。すなわち、語り手の語りを文書資料などで補強し、歴史などの外的基準に見合った唯一のライフストーリーを再構成することをめざす実証主義的アプローチでもなく、あるいは、1人ひとりの語りを複数重ね合わせることで唯一のライフストーリーに迫ろうとする解釈的客観主義的アプローチでもなく、語り手と聞き手との相互行為を基盤としたラ

蘭 由岐子（神戸市看護大学准教授）

イフストーリーの構成のあり方に焦点をあてて語りの分析や解釈をおこなおうとする第3のアプローチの主張である。

これまで主観的な過去の語りであると思われていた語り手の語りは、つねにインタビューの現在をとおして〈いま－ここ〉にあらわれていているものであること、さらに、それには、語り手独自の経験も含め、語り手が生きる世界のひとびとのくらしに密着した多様な意味世界があらわれていることをあきらかにした。すなわち、ある個人の語りには、「モデル・ストーリー」と呼ばれる、その個人の周囲のひとたちに共有されていたり、あるコミュニティのメンバーであればだれもが了解していたりするような物語や、「ドミナント・ストーリー」や「マスター・ナラティブ」と呼ばれる、その個人が生きた時代や社会に支配的な物語が反映されているとみるのである。そして、調査の個別具体的手続きについても、その認識論的視点から、広く共有される知識を提供してきた。たとえば、録音を前提としてインタビューをおこない、それをトランスクリプションすること、トランスクリプトの作成方法も、従来と大きく異なり、聞き手側の質問や語りも語り手の語りと同じように、省略されることなく書き起こすこと、また、インタビューの最初から最後まで、継起順序にしたがって書き起こすこと、

そして、語り手にトランスクリプトを返してチェックをしてもらい、インタビュー・テキストを確定するということなどである。

ライフヒストリー研究におけるこのような方法論の転換は、「ライフヒストリーからライフストーリーの社会学へ」と名づけることができる（蘭，2006）。

このような方法論は、わたしのよう到手探りでライフヒストリーの聞き取りをやってきた者にとって、自分の実践を振り返り理論的に位置づける大きな指針となった（蘭，2004）。また、聞き手と語り手との相互行為に徹底的に根ざしてインタビュー状況に反映される〈差別の日常〉を読み解こうというユニークな研究をしている倉石一郎も、「著者（桜井）の論考に接し、混沌の中にあった自分の研究に目鼻をつけるのにどれほど役立ったか知れない」と述べている（倉石，2003）。この方法論が桜井の長年にわたる被差別部落研究から紡ぎ出されたものであったという点からも、在日コリアン研究をやっている倉石やハンセン病者研究をやっているわたしにはぴったりフィットしたのだと思う。

2

伝えられる“声”や“リアリティ”の低減

新しい方法論によるライフストーリー研究は、質的社会調査法の中心的方法の1つとして確立された。その結果、従来の、語り手によって「語られたこと」が前面に出て聞き手である調査者が後景に退いたライフヒストリー論文はなりを潜め、代わりに、聞き手の質問なども語り手の発話と同じように位置づけられ、「語られたこと」（〈あとき-あそこ〉での話）が〈いま-ここ〉で「いかに語られたのか」と、語りの様式に注意をはらうライフストーリー論文が数多く発表されるように

なった（桜井編，2003；桜井，2005；山田編，2005；桜井編，2006；桜井ほか編，2008など）。すなわち、トランスクリプト作成において、聞き手の質問に語り手の語りとおなじ位置づけを与えたりインタビューの継起順序にそって作成したり、引用の際には聞き手の発語もあらわすといったことがなされ、また、語られたストーリーにマスター・ナラティヴ、モデル・ストーリー、個性的なライフストーリーなどの重層性を見いだす努力もされている。さらに、ストーリーの“裂け目”，モデル・ストーリーへの“抵抗”，新しいストーリーの生成にも目を配って、まさに対話的構築主義アプローチによるライフストーリー研究の体裁を整えている。インタビューの対象は、従来のライフヒストリー研究と同じく、統計的サンプリングの対象とはなっていない（数え上げられていない）、周縁人や被差別者、抑圧されたひとびと、病者、マイノリティが多く、ほとんどの研究がいまだ聞かれていない“声”や“リアリティ”を明るみに出す機会となっている。

ところが、このような方法論の“確立”に比して、ライフストーリー論文から語り手の“声”や“リアリティ”がもうひとつ聞こえてこない、見えてこないように思えることもしばしばである。概して、聞き取られたこと＝語られたこと（内容）が生き生きと実感できず、インタビューの語り手の“人生”を知ったという感覚がもたらされないのだ。そして、わたしたちがあたりまえとしている考え方や感じ方がそのことによって揺さぶられるという経験がほとんどない。わたしが“声”や“リアリティ”を求めたいのは、それらを知ることによって、社会学的な“知”も含め、わたしたちが現在もっている“知”の限界を知り、さらにそれを豊かにすることができる

と思うからだ。もちろん“声”がある個人の包括的なライフストーリー（人生の物語）である必要はない。また、すべての論文に“声”がないというわけではない。あくまでも“概して”である。とりわけ、著作全体のテーマが先に設定されているような論集の各論に顕著である。もっとも、それは読み手側の関心のもち方やそもそも論文の紙幅が足りないなどといった要因のせいだとも考えられるのだが、それにしてもなぜ“声”がストレートに聞こえてこないのだろうか。

3 方法論の標準化とその問題

すぐに思いつく理由は、これまで「語られたこと」を素朴に事実として提示し、声なき声を拾い集め提示することに焦点をあててきたライフヒストリー研究の視点が、今度は、「いかに語られたか」に移行することで「語られたこと」への比重が相対的に軽くなったからというものだ。つまり、もはや「語られたこと」は、語り手のかつて遭遇した社会的事実ではなく、聞き手との相互行為のもとで社会的・共同的に達成された社会的現実であって、その達成がどのようになされたのかをあきらかにすることこそが対話的構築主義アプローチの特長であるのだから「語られたこと」の内容が薄くなるのだ、と¹。たしかに「『方法』に対してあまりにも狭く焦点化してしまうと、『内容』の重要性が排除されてしまう」とホルスタインらも指摘しているほどだ（ホルスタイン・グブリアム、2004: 24）。だから、この理由はあながちまちがいはなかろう。しかし、ライフストーリー研究は、会話分析などちがって、「内容」を盛り込める余地は十分あると思われる（その方法については、4節で述べよう）。

この側面よりもむしろここで指摘したいのは、方法論が確立した結果もたらされるあらたな問題性についてである。方法論が標準化するということは、当該の技法が“秘儀”や“奥義”の域に内閉するのではなく、1つの学問的手法として万人に開かれることを意味するがゆえに、たいへん望ましいことである。ところが、方法論がアクセスしやすいテキストになり、皆によって学ばれるようになると（＝“消費”されだすと）、もとの方法論にあったさまざまな留保をつけた議論の複雑さが消去されて、皮相的な理解に留まってしまったり、方法論にあらわされた諸概念が個別の語りに安易に適用されてしまうことで個別の語りの独自性がなくなってしまう²。この、いわば方法論の標準化にともなうマニュアル化された用い方が、“声”の低減にかかわっているのではないだろうか。これは、方法論のなかみの問題というよりもむしろそれをどう読み解き使用するかというユーザーの側の問題である。したがって、ライフストーリー論に内在する独自の問題というわけではないが、インタビューによる調査が学問分野横断的にずいぶんおこなわれるようになった現在において、ライフストーリー分野に集中してあらわれるという意味で、この問題をここで指摘しておきたいと思う。

とりわけ、自然科学に準じた形式の研究が志向されてきた分野では、「方法」の明示が求められる。加えて、現在では、研究をはじめの前に倫理審査を受けるために研究計画書を提出しなければならない状況になっている。しかし、ライフストーリー研究では、聞き取りとする項目についてはある程度計画が立てられたとしても、相手の応答次第でその計画がじきに頓挫することも多く、通常は、インタビューの場における相互行為やインタビ

ュー・テキストを読み込んでいく過程でテーマが決まってくる。そのため、そこをおして書こうとすると、いきおい“手順”のようなものを方法論のテキストから抽出してしまうことになる。

そもそも自然科学系の学問が方法の提示を求めるのは、そこに再現性＝信頼性を担保するためである。しかし、ライフストーリー研究にそのような再現性を求めることは不可能である。したがって、ライフストーリー研究には別様の基準が適用されなければならないはずだ。だから、その求めに盲目的に従うことは意味があるとは思えない。しかし、いまや看護学領域などでの質的研究への関心の高まりを反映して、ライフストーリー研究の導入も活発である。この動きが、ライフストーリー研究の方法論の豊かな進展を阻むようにならないよう注視する必要がある（しかし、制度化のちからは大きく、壁は厚い）。

そして、さらにいえば、方法論はインタビュー調査にかかわるすべてのことがらを包括しているわけではないから、方法論を踏襲するだけでよい研究ができるとはかぎらないのである。

4 “声”をとらえるために ——方法論の内部で

では、“声”がはっきりと聞こえてくるようにするためにはなにができるのだろうか。自戒も込めて、まずは、対話的構築主義の方法論の内部でできることから思いつくままに述べていこう。

1つは、ライフストーリー・インタビューの過程を“耕す”ことである。ホルスタインとグブリアムがいうように、わたしたちはアクティヴな聞き手としてインタビューの場に臨み、語り手の語りの産出を活性化する。そ

の役割を積極的に担わなければならないのである。まずは、論文で聞かせるべき“声”を語り手の口から語ってもらうように、関心を集中させ、語り手の語る〈あのとき－あそこ〉の話（桜井は〈物語世界〉と呼ぶ）に真剣に入り込むとともに〈いま－ここ〉で〈物語世界〉に対する現在の意味づけをたずね、さらにトピックの転換をはかることである。すなわち、「回答者が調査の対象となる問題に本腰で取り組めるように、物語を話す時の立場や語り手のリソース、そして、回答者が取るべき方向づけや、この問題の前例などを示したり、ときには提案さえする」のである（ホルスタイン・グブリアム、2004: 192）。また、調査テーマに関する文献を読み、フィールドに足を踏み入れることによって、幅広い「背景知」をたくわえ、聞き取りのリソースを増やしておく必要がある。たとえば、語り手が突如持ち出したトピックに心当たりがないときには、語り手の応答はいまいなものになりがちである。受け答えの短い返事に続けて、その「耳慣れない」トピックがどんなものであるのか追跡的に聞くこともままならない（蘭、2009: 264）。もちろん、再度語り手にアクセスできるときには、トランスクリプトの熟読によって事後的に重要性に気づくことでカバーできるかもしれないが、聞き取りのその場でやるに越したことはない。また聞き取りの相手によっては、背景知をもっていない聞き手を「（みずからの経験を）語るに値しない」相手だと判断する可能性がある。ただし、「背景知」に通じることは、聞き手の調査トピックへの“構え”や語り手への過剰な“期待”をもたらしてしまう可能性もあるから、調査にとっては両刃の剣となることは肝に銘じておくべきである。

2つ目は、桜井が詳細にあきらかにしてく

れたインタビューの構成に目を配ることである。桜井は、インタビューについて、会話を土台にしながら聞き手によって聞き取られ語り手が語るライフストーリーの部分をもち、さらにそのライフストーリーの部分は、聞き手と語り手との〈いま－ここ〉でのやりとりで展開する〈ストーリー領域〉と、おもに語り手が〈あのとき－あそこ〉の出来事を筋（プロット）のある話として語る〈物語世界〉からなると説明する。これらは、インタビュー・テキストを読んでいくと把握できる。そして、ラボフの物語文についての分析枠組みを参照して、語りの要素でもっとも重要なものとして〈評価〉の機能をあげる。〈評価〉を示すフレーズは、語り手の思いや感情、判断がストレートに現れている部分である。（桜井、2002: 116-27）

このような対話的構築主義アプローチによるテキストの読解方法に依拠すれば、語り手の“声”はまさに〈評価〉にあらわれているのではないか。〈物語世界〉で〈評価〉をおこなっているのは〈あのとき－あそこ〉で展開されているストーリーを語っている過去の語り手であり、〈ストーリー領域〉での〈評価〉の主体は、聞き手の目の前にいる語り手である。この2つの〈評価〉を記述の前面に出すことで、語り手の“声”がより高くなるにちがいない。とりわけ〈いま－ここ〉での〈評価〉は、“聴衆”（目の前の聞き手をはじめ、調査実践を通して自分の声が届いていく相手など、語り手が想定しているひとたち）を意識し、さらにはインタビューのおこなわれている“時”（歴史的時間、社会的文脈の位相）を反映したものになっているだろう。それを通して、インタビュー調査をした時点での歴史性＝現在性を活写できる。また、2つの〈評価〉に“落差”があるとすれば、その“落差”にこ

そ〈あのとき－あそこ〉以降の語り手の人生の“転換”があらわれているのではないだろうか。これらの〈評価〉は、文字どおり、語り手の語った語りから取り出されるものであり、個別のインタビューの語り手の“声”として読者に届く可能性が高い。確実に届くかどうかは、記述のレトリックにもかかっていると思われる。聞き手の発話部分と語り手の発話部分を並列的に表示するかたちでの引用がつねに効果的であるとはかぎらず、書き手の創意工夫がおおいに求められるところだ。

5

調査者がまず“声”を聞くこと—— インタビュー調査をおこなうことの 意味

方法論の“内部”での議論では、アクティブな聞き手にしても、〈評価〉の“声”にしても、インタビュー・テキストのなかに残る“声”を広げ、大きく取り上げる技法であった。では最後に、テキストに残らない部分こそが、“声”を聞き、伝える部分であることを指摘して本稿を終えよう。それはライフストーリー・インタビューをおこなうことの意味を考えることでもある。

社会調査では、通常、「調査」をはじめるにあたって、テーマに沿ったある属性をもつひとを選定する。インタビュー調査もしかりである。アクティブ・インタビュー論では、物語を話す能力があればあらゆるひとびとがインタビューの対象になるというが（ホルスタイン・グブリアム、2004）、なんらかの属性を「ひとびと」にあてはめないとところから「調査」としてのインタビューをはじめるとは不可能だろう。したがって、わたしたちは語り手になんらかのカテゴリーをあてはめてインタビューに赴くことになる。

そこで、少なくとも1時間から2時間、あるいはもっと長い時間、面と向かって相手の

語りに耳を傾けながら、同じ時をすごす。そして、語りを聞く。

語り手が語る“聞き手が知らない”(まえて仕入れた“背景知”にも含まれていない)多くのことを語る。そこには、楽しかったこと、つらかったこと、心身ともにもたらされた痛み、生活の知恵や工夫、ある出来事をめぐる当時の状況、思いや“推論”がつまんでいる。〈あのとき－あそこ〉の〈物語世界〉に思わず引き込まれ、独特の時間をすごす。聞き手の気分も軽くなったり重くなったり。物語がおかしくて思わず笑いこけていたら、「なにがおかしいねん!」と一喝され、〈いま－ここ〉に急にひきもどされる。また、批判的な問いかけもなされるだろう。さまざまな表情、語り口、方言、息遣い、声のトーン。まさに、これらのすべてが“声”である。これらはトランスクリプトには残しにくいものであるが、インタビューの場で聞き手はその“声”に確実に出会っているはずだ。

そして、その“声”を通して、当初語り手に付与されたカテゴリーは変容される。目の前にいる語り手は、たしかにあるカテゴリーに関連した出来事に遭遇したひとであるが、しかし、その人があらかじめ想定されたカテゴリーにはりついたさまざまな特徴をそのまま体現しているわけでないことが、調査の過程を通して明らかになる。ホルスタインらが回答者の選択に際して「あらゆるひとびと」といったのはこのことを先取りした方法論的示唆であったのだろう。

他方、語りは耳を傾けているだけで一方的にもたらされるものではない。前述のアクティヴな聞き手になるには、こちらから働きかける必要がある。この働きかけは単なる“質問”ではない。方法論の議論では、“質問”や“問いかけ”“発話”といった用語でしか

あらわされないが、それは「まさに聞き手の〈ひと〉としてのありようや資質、それまで生きてきた生活の歴史や経験にも関連するものであり、『ききとる』流れのなかで、相手を詳細に観察し、“なにを考え、感じながら、私に語ってくれているのか”をおしはかることから生み出される」複雑な行為なのである(好井, 2008: 295)。このとき、語り手が“なにを考え、感じながら、私に語ってくれているのか”をおしはかる」とき、全身を“耳”にして語り手の“声”を聞いていることになるだろう。そして、語り手の“声”に応じて懸命に答え、問いを返すとき、聞き手というカテゴリーを離れて、さまざまな自己を表出しなければならないだろう。どう答えてどうふるまうのか——それは、聞き手を“安住させない”スリリングなときであり、聞き手は「わたし」自身を生きざるをえなくなる。

ライフストーリー・インタビューの調査は、このようにインタビューの〈いま－ここ〉を語り手とともに一緒に“生きる”ことである。このとき、語り手からどれほど多くの“声”を受け取り、インパクトを受けたのか、そして、そのさまざまな“声”をどれほど強く他者に伝えたいと思ったのか、その手段としてライフストーリー論文の形式がもっとも有効だとどれほど確信したのか。このことを自分のなかでいま一度見つめ、ここを基盤としてインタビュー・テキストをひらくとき、ようやく論考のなかに“声”をひびかせる条件が整ったといえよう。いいかえれば、論考にひびく語り手の“声”は、インタビューの場での「わたし」の経験と不可分なのである。「わたし」が“声”に向き合い、それこそが調査者の明らかにしたいテーマであるとき、論考のなかの“声”もはっきりと聞こえてくるのではないだろうか。

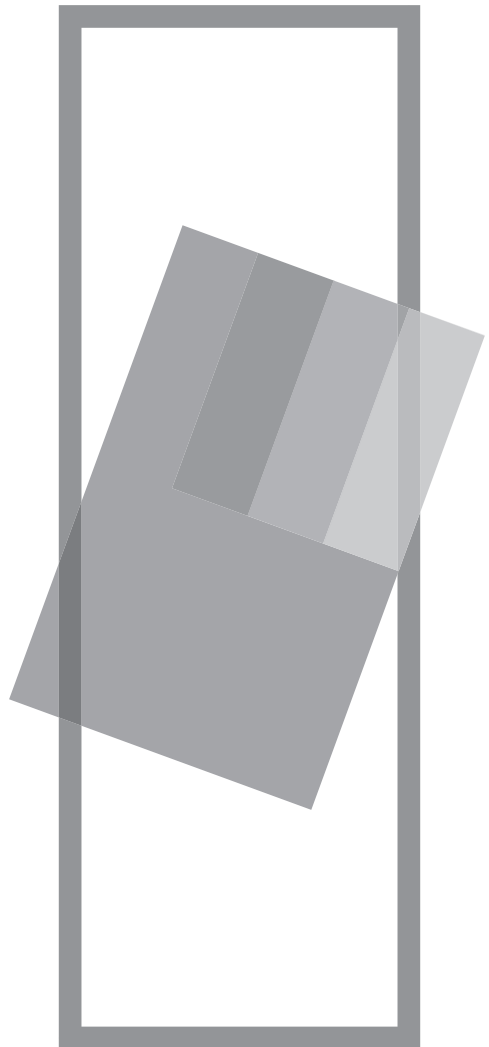
注

- ・1 このような、方法論がライフストーリーの個性や他者の生の理解を損ねてしまう可能性について、桜井自身は、「方法論が方法論であるがゆえに必然的にかえこむ『あやうさ』」すなわち、「普遍化や一般化への『あやうさ』」と、他者の生や文化の理解への『あやうさ』として自覚している（桜井，2002: 11-12）。このように、桜井の方法論は著作の全体を通してきわめて慎重に、かつ、周到に展開されている。
- ・2 注1と同じ。
- ・3 わたしも参加した「輸入血液製剤による HIV 感染被害問題研究」において、医師へのインタビューが当初うまく進展しなかったのは、わたしたちが背景知としての血友病や血友病診療、ひいては医療世界についてのローカルな知識を身につけていなかったためであるとも考えられる。同時に、マスメディアの報道やジャーナリストによる文献から得ていた背景知は、インタビューの場や語りの解釈に一定の構えをもたらし、そのことが医師の反発を招いたともいえる（輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会編，2009）。

文献

- 蘭由岐子，2004，『「病いの経験」を聞き取る——ハンセン病者のライフヒストリー』皓星社。
- ，2006，「社会学的生活史研究の現在——『ライフヒストリー』から『ライフストーリーの社会学』へ」大阪歴史科学協議会『歴史科学』183: 1-10。
- ，2009，『「病気が人格をもってるじゃないですか」——ある臨床医の『葉害 HIV』問題経験』輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会編『医師と患者のライフストーリー——輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究最終報告書』第1分冊，ネットワーク医療と人権，235-65。
- ホルスタイン，J.・J. グブリアム，2004，『アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査』山田富秋ほか訳，せりか書房。（J. A. Holstein and J. F. Gubrium, *The Active Interview*, Thousand Oaks, Calif.: Sage, 1995.）
- 倉石一郎，2003，「書評 桜井厚著『インタビューの社会学』」『ソシオロジ』48(1): 146-50。
- 桜井厚，2002，『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。
- 編，2003，『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房。
- ，2005，『境界文化のライフストーリー』せりか書房。
- 編，2006，『戦後世相の経験史』せりか書房。
- ・小林多寿子編，2005，『ライフストーリー

- ・インタビュー——質的研究入門』せりか書房。
- ・山田富秋・藤井泰編，2008，『過去を忘れない——語り継ぐ経験の社会学』せりか書房。
- 山田富秋編，2005，『ライフストーリーの社会学』北樹出版。
- 輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会編，2009，『医師と患者のライフストーリー——輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究最終報告書』第1分冊，ネットワーク医療と人権。
- 好井裕明，2008，「事例調査の基本をめぐって——『はいりこむ』『ききとる』『よみなおす』」新睦人・盛山和夫編『社会調査ゼミナール』有斐閣。





2

エスノメソドロジー研究のパフォーマンス ——質的調査研究の臨床性およびエスノメソドロジーの演劇的異化——



秋葉昌樹（龍谷大学文学部准教授）

1 はじめに

近年筆者は、主に養護教諭らとともにフォーラム・シアターと呼ばれる演劇の実践を試行することで（Akiba and Kumagai, 2008）、これまで会話分析的にアプローチしてきたエスノメソドロジーに会い直そうと取り組んでいる。

一般にエスノメソドロジーの論文は、データとして人々の会話の相互行為が書き起こされたトランスクリプトを呈示しつつ記述する点で、きわめて具体性を伴っている。つまり研究対象社会の人々（エスノ）にとって、そこで記述されたテキストには、まさに自分たちのことが描かれていることになる。が、研究者の側は、一般的には記述を超えた何事かに対しては研究プログラム上「無関心」である。端的に言えば、エスノメソドロジーの記述を何らかの点で当事者世界の人々に役立てようとする志向性をもつことはない。しかし、役立たなかったはずの記述が、結果的に対象世界の人々との交流をもたらし続けるきっかけになったとき、研究者がどのように応答することができるだろうか。人々を会話分析的記述の「観客」の位置に固定しないやり方はないだろうか。

筆者はこれまで、以上のような問題関心を

もってきたのだが、こうした疑問には、参与観察等の経験をふまえたエスノメソドロジーの研究に共通する実践的課題としての側面があるように思う。本稿では、以上の観点からエスノメソドロジー研究に基づく質的調査研究の課題を探るべく、フォーラム・シアターの実践を媒介に試行錯誤する筆者自身の事例をもとに、話題提供したいと思う。

2 フォーラム・シアターとは何か

フォーラム・シアターとは討論劇とも訳される民衆演劇のスタイルで、ブラジルの演劇家アウグスト・ボアールによって始められたものである（ボアール, 1984）。フォーラム・シアターの理念の1つは、伝統的演劇における俳優と観客との関係構造を塗り替えることにある。すなわち、伝統的演劇においては、演劇的生産手段は俳優（＝行為者）に独占されていた。他方、民衆は観客の位置に固定され、劇の登場人物が困難を乗り越えるさまに共感し、ある種のカタルシスを得ていた。しかし劇場を出た民衆が戻っていく先は、以前と変わらない苦痛に満ちた現実にはほかならない。ところが観劇でカタルシスを得た民衆には、そうした現実を変えていこうとする行動力がもはや残されていない——ボアールはそう考えたわけである。

そうした実情を前に、ボアールは「『観客』ということばは悪いことばだ」（ボアール、1984: 78）と宣言し、俳優と観客の区別のない、民衆自身が行為者（＝俳優）となる演劇のスタイル、即興で演じられるワークショップ型の演劇「フォーラム・シアター」を、劇場を飛び出し、人々の生活拠点に向き実践しはじめたのである。フォーラム・シアターでは、人々自身によって、解決したい問題を含む日々の出来事がテーマとしてとりあげられ、俳優らによってその場で問題場面が即興で演じられる。そして即興劇を観ていた問題の当事者に、問題場面をどのように解決していけばよいか、アイデアを出し合ってもらい、問題解決のための行動シミュレーションとして、即興劇に入り込んで再演してもらうことを繰り返すわけである。

演劇ワークショップとは、もともとは商業的公演を目的としない稽古のことをさす。ボアール自身はこれを「試行の演劇（rehearsal-theater）」と呼んでいる。ボアールにとって、なによりもそれは「演劇をもちいた民衆教育」の実践であり、「商業演劇（spectacle-theater）」のリハーサル（＝試行）を意味しない。むしろ社会のありようを変え、そのなかで民衆が自分自身の社会的位置を変えるための行動を志向し、そのためのリハーサルを繰り返し試す演劇である（里見、1990: 245; 秋葉、2006a: 29-30）。

3 | フォーラム・シアターと質的調査研究の接点——パフォーマンス・エスノグラフィ

演劇には、ボアールがやってみせたように、その実践を人々へと開いていくことで、参加する人々の日々のありようを具体的に振り返りつつ、さらにそうしたありようを変えていくことを促す性質が備わっている。そうした性質は、以下にみるようなかたちで、文化人

類学や社会学における質的研究とも結びつけられてきた。真っ先にあげるとすれば、ンデンプ族の儀礼等に関する著作や社会劇等の分析視角で知られる文化人類学者ヴィクター・ターナーの晩年の仕事——彼の言うパフォーマンス（パフォーマンス）・エスノグラフィ（Turner and Turner, 1982）の試みがあるだろう。

ターナーは晩年のある講演の中で、人類学の学生たちが図書館の閲覧室で自分たちとは縁遠い人々の生活を記したエスノグラフィと格闘し、人類学の理論に振り回されながら「面白味のない時間を過ごす破目になっている」と憂い、「人類学は“生きている男”，“生きている女”についての学問でなければなりません」と語っている。そうした思いから、ターナーは、演劇家でパフォーマンス研究の第一人者であるリチャード・シェクナーらとともに演劇ワークショップを開催し、そこに参加した文化人類学者や演劇家に、ンデンプ族の儀礼のもつ象徴的意味をパフォーマンス・アーツ、つまり演劇化することによって体感してもらおうとしたのである（ターナー、1981: 秋葉、2008: 47-48）。

他方、社会学者のノーマン・デンジンは、ターナーのそれと同様の——つまり自身が「フィールドで取ったノートを演じられるテキストへと転換」（＝パフォーマンス・テキスト）し上演することで、「生きられた経験の意味」を「パフォーマンスに書き込」み、「パフォーマンスの中で可視化」する——方法を取りつつも（デンジン、2006: 297-313）、さらにそうした営みを「公共の領域における問題となった（個人的）トラブルについての共同意識」（デンジン、2006: 296）へと実践的に接続しようとする。

このようにパフォーマンス・エスノグラフィは、参与観察に基づく質的研究の社会的意

義を問い直し、その可能性をさらに開拓しようとする試みにもなっている。なぜならこれらの試みからは、参与観察が、エスノグラフィを書くためのデータ収集の営為である以上に、生身の人間として日々直面する問題に向き合いつつ、ありうべき問題解決の選択肢を探っていく実践的方法であるということがクローズアップされるからである（秋葉，2008：48）。ひるがえって演劇家ボアールのフォーラム・シアターは、パフォーマンス・テキストを媒介とせず、即興劇を軸に生身の人間とともに問題に向き合うべく展開される、よりラディカルな実践であるとも言えるだろう。

4 「エスノメソドロジ的無関心」と「名前のない問題」——保健室のエスノメソドロジをめぐって

以上の点をふまえ、本節と次節にわたって、いったん筆者自身のエスノメソドロジ的研究を事例にしつつ、これを批判的に振り返ることで、議論を進めることにしたい。

筆者はこれまで、主に学校保健室のエスノメソドロジ的研究を行ってきた（秋葉，2004 ほか）。そしてその際の研究スタイルは、複数の保健室で参与観察を行い、会話分析に基づき保健室のエスノメソドロジを解読するというものであった。

研究を始めた1990年代初頭には、保健室登校ということばに象徴されるように、さまざまな悩みを抱えて保健室に来訪する生徒に対し支援するやり方を、養護教諭が模索する状況にあった。そうした生徒への有効な対応方法を探ることは、養護教諭にとって喫緊の課題でもあった。そうした保健室・養護教諭のもとに、子どもたちが休みなく来訪するのはなぜなのか——筆者はこうした問題関心から、保健室において子どもたちへの対応は、どのようにして行われているのか、その特徴はどのような点にあるのかなどの問いをたて

研究を始めた。その際、会話分析のスタイルは、格好の手法に思われた。

ポイントは「エスノメソドロジ的無関心」（Garfinkel and Sacks, 1970：345-46）である。会話分析は、録音・録画された相互行為の記録をもとに、それがどのように成し遂げられているか、淡々と記述していくエスノメソドロジの研究手法である。淡々と記述していく以外、いっさいの評価的なまなざしをもち込まないこと、つまりそうしたことには関心を払わないこと（＝エスノメソドロジ的無関心）が分析の指針である。それは、人々が「行っているが気づかない」相互行為の方法的特徴を解読することに対して、分析者が集中するために設定された指針であった。

ここでは詳述しないが、会話分析をとおして見えてきたのは、養護教諭の日々の教育実践が、子どもの悩みごとに対して向き合う際、ほとんどの場合、悩みそのものよりもむしろまずもって子どもの身体的なトラブルに対応していたということである。しかし子どもの身体的なトラブルに集中する過程で、子どもたちの悩みごとは相対化され、また異化されていき、（乱暴な言い方をしてしまうなら）子どもたちは、納得したり安心したりして、養護教諭とのある種の信頼関係が構築されていることが見えてきた。しかもそれは、個々の養護教諭のパーソナリティに依存するというよりも、保健室ならではの相互行為の方法的特徴として記述することができるものであった。相互行為の記録からは、そうしたさまざまな方法的特徴が解読されうるものの、養護教諭自身はそうした特徴を「行っているが気づかない（seen but unnoticed）」こともありうるのである。しかも、子どもたちへの日々の対応の具体的ありように伴う養護教諭自身の思いは、既存の教育学ないしは教育社会学、さらには学校保健の学問的枠組みでは解

読しようもない、いわば「名前のない保健室問題」とでも呼ぶべき側面を伴っていた。

「名前のない保健室問題」というのは、養護教諭が「行っているが気づかない」水準の方法実践の文脈に、つまりさまざまな養護教諭のそのときどきの感情を伴いつつ保健室の目の前の現実¹に埋め込まれている問題である。それは往々にしてあいまいであり、断片的にしか手に入らないがゆえ、多忙な日常において過ぎ去っていつてしまうような名づけようもないものなのである。

5

臨床というコンテクストにおける現場への還元という問題

しかし結果的には、筆者が呈示したトランスクリプトの中に、養護教諭が自分自身の「名前のない保健室問題」を投影し読み込むことは容易であったようである。しかも筆者自身は、論文化に際して、結果的に「無関心」の指針を逸脱し、ポジティブな評価を自然と持ち込んでいた。しかし（おそらくだからこそ）そうした記述は、現場サイド、つまり養護教諭や学校保健の専門家によって好意的に受け止められもした²。ただし、それはあくまで結果論であり、エスノメソドロジー的記述自体が、エスノメソドロジーの当事者によってどのように受け止められるか、どのように再－解釈されるかという問いは、研究の社会的意義を考えるうえで、筆者にとって残された実践的課題であった。

つまり、通常ならば「エスノメソドロジーが記述してきたような水準の社会秩序は、本質的に成員の『興味を引きえない』」（串田，2000：26）ものであり、記述を超えて何らかの理論構築やその効果を狙うことがない。にもかかわらず成員（この場合、養護教諭を含む専門家コミュニティ）からある種の興味関心をともなって受け止められたとき、そのことに

対する応答性をいかに担保するかという課題である。

しかも近年、そうした課題は、教育の社会学的研究の領域で主張されてきた、質的調査研究に臨床性を求める要件とも重なる課題である。志水宏吉（1996：56-59）は、その要件として、「教育問題の解決に資する」ことと「個別・具体的な現実³に根ざすこととにポイントを定め、論文化に際しても知見を現場に還元するセクション⁴を設けるべきだ、と論じる。また酒井朗（2002）は、「臨床的」ということばには、①「病床（＝ベッドサイド）の」という意味に加え、②「〔判断などが〕分析的、客観的、冷静な」という意味等もあることに注目し、社会学的な臨床研究の意義を説いた。

エスノメソドロジー研究の場合、②の分析的で冷静な視点については、「無関心」の指針が研究プログラム上あらかじめ担保しているが、①「病床（＝ベッドサイド）の」という側面、あるいは「教育現場に根ざした」という側面については、トランスクリプトというテキストを媒介にのみ間接的に達成されるにすぎない。かの「エスノメソドロジー的無関心」という指針には「問題の解決に資する」プラグマティックな志向性はそもそも備わっていないからである。

6

エスノメソドロジーの「記述」に基づく異化——その試みと限界

以上の2節においてみてきたことは、エスノメソドロジーを記述すること、ないしは記述されたエスノメソドロジーをふまえ、エスノメソドロジーの当事者/実践者のプラグマティックな関心に応答しようとする際に浮上する問題である。

そうした問題への応答可能性を探るべく、筆者は勤務する大学の演習授業等で、トラン

スクリプトを実際に演じてもらい、さらに再分析を繰り返す演劇的ワークショップを試行してきた（秋葉・広川，2005；秋葉，2006bほか）。

なかでも、非常勤先の大学院で行った、保健室のトランスクリプトをもとに養護教諭らとともに試行した演劇ワークショップに際しては、筆者の想定を超えたさまざまな思いが養護教諭の側から表明された点で興味深い機会となった。

養護教諭とのワークショップで取りあげたトランスクリプトの1つが、女子中学生が腹痛を訴え保健室に来室したところから、やりとりを進めるうちに悩みを打ち明けるようになる場面である。そのトランスクリプトをいわばパフォーマンス・テキストとして参加者に即興で演じてもらい、それをビデオに収めたうえで、ラフなトランスクリプトにしてもらった。そうすることで、記述された保健室のエスノメソドロロジーを、演じることによって再体験したうえで、さらに分析してもらうことにしたわけである。

すでに述べた大学の演習授業の場合と同様に、養護教諭対象のワークショップの場合にも、あくまでエスノメソドロロジーの研究方法的練習として発想されたものであった。つまり、この場合参加者に馴染みの保健室の相互行為データを用い、エスノメソドロロジー（＝トランスクリプト）分析の機会をもってもらうことがそもそもの狙いであった。

しかし、結果的に見れば、トランスクリプトを出発点にエスノメソドロジックな記述と向き合ってもらうプロセスで、参加者個人個人は、そのパーソナルな経験をトランスクリプトに重ね合わせていった。トランスクリプトは、自分自身の保健室のデータではない。が、しかし、そのトランスクリプトは、まさに自分たちの「生きられた現実」でもある。同様

の相互行為場面で自分ならどうするか、どうしたいか、という経験に基づいたプラグマティックな問題意識と、さらにそれぞれの思いが交錯したのだと思われる。そのプロセスで、参加者は次第にトランスクリプト場面から離れていった。そうして参加者相互に共通する問題はごく自然にあぶり出され、当初の想像とは異なり、「名前のない」語りが白熱し、教室の雰囲気は盛り上がった。それゆえ筆者は、もはや「無関心」の指針に固執することなく、トランスクリプトの続きの場面を創造的に演じてもらうことにし、それぞれの「名前のない」エスノメソドロロジーに向き合ってもらったわけである。

7 フォーラム・シアター的实践

その後筆者は、フォーラム・シアター実践のための共同研究プロジェクトに取り組んできた。そこでは上述のような経緯もあり、意図せず出会うことになった養護教諭の「名前のない問題」にポジティブに向き合うことを意識した。

本節で取りあげるフォーラム・シアター的工作ショップは、教師向けの研修センターや研究協力者の勤務する大学、学校の保健室などを会場に、複数の地域で多くの場合20～30名の参加者とともに実施してきた（養護教諭が勤務する学校の校長などが参加したワークショップもあった）³。

そうした機会にはトランスクリプトは作成していない。むしろ次の点にこだわってきた。すなわちそれは、「自分たち自身のこと」をテーマにし、「イベント感覚」で参加できるようにすることであり、「状況に応じて融通の利く」（Kumagai, 2003）ように場作りに臨むことであった。

ワークショップでは、シアターゲーム（ス

ボーリン、2005)と呼ばれるゲーム感覚のアクティビティによって数名からなるグループをつくり、「昨日、学校で……」というテーマで自分の保健室の日常について語り合ってもらった(そうしたテーマにしたのは、語りの個別性・具体性や、「イベント」に参加するような気軽な構えを確保することができると考えたからである)。その後、グループごとに具体的ストーリーを構成し、即興劇として発表してもらった。

基本的に即興劇の集団制作は、自分たちグループが演じる劇空間に、「昨日、学校で」経験した問題場面をインストールし、さらに学校現場に典型的なストーリーラインとして再構成し、共有してもらうプロセスから成る。そして即興劇は、参加者間で共有したい問題場面に至ると、その時点でストップしてもらい、フロアに意見を求めることにした。そうすることで、参加者の多くは、劇中で演じられた個別・具体的な問題場面に、職務上の共通の悩みが含まれていることを口々に表明し、互いにうなずきながら悩みを共有していた。このような状況において、ようやく筆者らは参加者とともにフォーラム・シアターを始めていった。そうして、悩める「昨日」を含んだ即興劇は、フロアから提案された具体的な行動シミュレーション案によって繰り返し再演された。⁵

8 エスノメソドロジーの演劇的異化

たとえば、少々の擦り傷で保健室に来室した生徒に対する手当ての方針をめぐる、保護者対応にきめ細やかでありたい学校管理職と、専門的視点からけがの程度に応じた応急処置で十分だと判断する養護教諭との間で生じたせめぎあいなどの問題場面が演じられたとき、シミュレーションされるのは養護教諭

が管理職と渡り合う際の相互行為のありようであった。また、別のグループによって演じられたのは、緊急度の異なる複数の児童が、休み時間に五月雨的に保健室にやってきたとき、どのように対応の順番を説明し、実践していくかという問題がシミュレーションされた。フォーラム・シアターでは、そうした相互行為における保健室のエスノメソドロジーをその場で立体化し、「異化」していく。

養護教諭が書いてくれた感想の中には「○○先生の演技ぶりが楽しかった」といったものがあった。そのことは参加者が、演劇的表現行為自体にも関心を振り向けていたということである。つまりフォーラム・シアターという仮構の場であったとしても、具体的なコンテキストとともに説得や交渉などのいくつかのバージョンが試行されることで、保健室のエスノメソドロジーは「パフォーマンスに書き込」まれ、「パフォーマンスの中で可視化」され出会い直されていく。このように、フォーラム・シアターの実践は、トランスクリプトという記述を媒介とせず、ダイナミックに当事者＝参加者がエスノメソドロジーとの出会い直しをその場で達成するのである。

研究手法としてのエスノメソドロジーの標準化された姿が今日あるとすれば、フォーラム・シアターの実践の試みは、そうしたものとかけ離れていると思う。その一方で、臨床性や応答性を考慮に入れた質的調査研究としてのエスノメソドロジーを模索する1つのたたき台にはなるようにも思われるのである。

注

- ・1 「名前のない○○問題」というのは、フェミニズム運動の指導者ベティ・フリーダン(1963)の「名前のない問題」に依る。フリーダンは、1950～60年代の主婦たちが日常的な疎外感や不安を抱きながら社会的に取り残されている事態に対して、社会に広く知らしめる必要はあるものの、名づけよう

もない問題であると提起したのである。

- ・ 2 たとは森昭三『変革期の養護教諭——企画力・調整力・実行力をつちかうために』（大修館書店、2002年）などでは好意的に取り上げられた。
- ・ 3 この取り組みは、平成18-19年度科学研究費補助金・基盤研究C「演劇的手法及びエスノメソドロジー分析による教育実践におけるコミュニケーション研究」（代表者：秋葉昌樹、共同研究者：中根真・熊谷保宏）の一環として開始し、平成20-22年度科学研究費補助金・基盤研究C「養護教諭のヘルスプロモーションに対するパフォーマンス・エスノグラフィ的支援研究」（代表者：秋葉昌樹）において、支援の具体的方法を軸に展開中である。
- ・ 4 本節と次節の内容は、Akiba and Kumagai (2008)の一部をもとに、加筆修正した。
- ・ 5 筆者の場合、プロジェクトを応用演劇学者・熊谷保宏らと進めたことで基本的スタンスを編み出すことができたが、ボアールも「演劇的生産手段を民衆の手に手渡すこと」をスローガンの1つに掲げていたように、方法それ自体としては、ある程度の経験次第で十分実施可能なものである。
- ・ 6 プレヒト（1962）の演劇論等を参照願いたい。
- ・ 7 参加者からの感想には次のようなものもあった。「場面が設定されたロールプレイは何度かやらせていただいたことはありますが、自分たちの日常の1コマを題材にして、劇にするのは初めての体験でした」というものや「意見交流をしても実際の場面というのは会話では交流しきれない」という思いをもっていた、というものである。

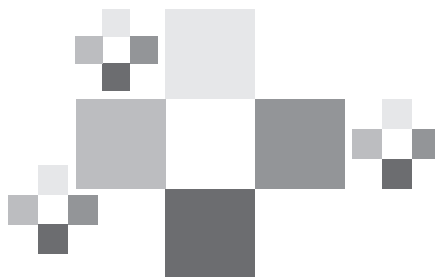
文献

- 秋葉昌樹、2004、『教育の臨床エスノメソドロジー研究——保健室の構造・機能・意味』東洋館出版社。
- 、2006a、「“ブリーチング実験”と“見えない演劇”のあいだ——臨床的教育研究の生産手段としての演劇的問題表象のエスノメソドロジーへの覚醒をめざして」『龍谷大学論集』468: 25-41。
- 、2006b、「教育学教育における臨床的方法実験としての演劇——エスノメソドロジー・会話分析研究を経由して」『演劇学論集（日本演劇学会紀要）』44: 109-29。
- 、2008、「参与観察」（第3章「質的調査技法と質的データの特質」の第2節分担執筆）北澤毅・古賀正義編『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社、45-48。
- ・広川義哲、2005、「演劇的問題表象のメソドロジー序説——リアリティとアクチュアリティの往還と教育研究における臨床性」『龍谷大学教育学会紀要』4: 17-35。

Akiba Yoshiki and Kumagai Yasuhiro, 2008, "Poet-

ics of Workshop: Teacher Training through Theatre with Ethnomethodology," *Japanese Journal of Research in Drama and Theatre Education*, 1: 18-22.

- ボアール、A., 1984、『被抑圧者の演劇』里見実・佐伯隆幸・三橋修訳、晶文社（原著、1975年）。
- プレヒト、B., 1962,「実験的演劇について」『今日の世界は演劇によって再現できるか——プレヒト演劇論集』千田是也編訳、白水社（原著、1940年）。
- デンジン、N.K., 2006,「解釈の実践とポリテクス」N.K. デンジン・Y.S. リンカン編『質的研究ハンドブック（3巻）』平山満義監訳、北大路書房（原著、2000年）。
- フリーダ、B., 1965,『新しい女性の創造』三浦富美子訳、大和書房（原著、1963年）。
- Garfinkel, H. and H. Sacks, 1970, "On Formal Structures of Practical Actions," in J.C. McKinney and E. A. Tiryakian eds., *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, Appleton Century Crofts.
- Kumagai Yasuhiro, 2003, "TO As A Result," *PTO Newsletter*, 2 (3): 11.
- 串田秀也、2000,「訳者解説（アーヴィング・ゴッフマン『フィールドワークについて』）」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房。
- 酒井朗、2002,「臨床教育学構想の批判的検討とエスノグラフィの可能性——『新しい教育学の創造』と『問題への対処』をいかにして同時達成するか」『教育学研究』69 (3): 322-32。
- 里見実、1990,『ラテンアメリカの新しい伝統——〈場の文化〉のために』晶文社。
- 志水宏吉、1996,「臨床的学校社会学の可能性」『教育社会学研究』59: 55-67。
- スポーリン、V., 2005,『即興術——シアターゲームによる俳優トレーニング』大野あきひこ訳、未来社（原著、1963年）。
- ターナー、V., 1981,「パフォーマンスとしての人類学」『現代思想』9 (2): 61-80。
- Turner, V. and E. Turner, 1982, "Performing Ethnography," *Drama Review*, 26 (2): 33-50.





言説分析は、社会調査の手法たりえるか



赤川 学 (東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

1 社会調査における言説分析

昨年、社会調査の基礎に関する教科書を執筆する機会に恵まれた(『社会福祉学習双書』編集委員会編, 2009)。これを機に、現在英米で使われている社会学の教科書や、これまで日本の社会学でスタンダードとされてきた社会調査の教科書に目を通す機会を得た。

驚いたことの1つは、英米の標準的な教科書のなかに、言説分析に1章を割いているものが存在したことである。たとえば Oxford University Press から出ているアラン・ブライマン編の『社会調査法(第三版)』では、量的調査、サンプリング、構造化インタビュー、内容分析、二次分析と公式統計、エスノグラフィと参与観察、インタビュー、フォーカスグループ、質的調査における言語、データ源泉としての文書、グラウンデッド・セオリー、コンピュータ支援型質的分析など、個別の技法が章ごとに紹介されているが、このなかで言説分析は、会話分析(conversation analysis, CA)、批判的言説分析(critical discourse analysis, CDA)とならんで、質的調査の方法の1つと位置づけられている(Bryman ed., 2008)。

これに対して日本で刊行されている社会調査の教科書では、言説分析を社会調査の方法

として紹介しているものは皆無に近い¹。そして社会調査の特徴を、「現地調査によって直接に」社会事象にアプローチするところにあるものが多いことに、あらためて気づかされる。いうまでもなくこれは、安田三郎氏による社会調査の定義、すなわち、「一定の社会または社会集団における社会事象を、主として現地調査によって、直接に(first hand)観察し、記述(および分析)する過程」(安田・原, 1982: 2)という定義の影響力の強さを物語る。この「現地調査によって、直接に」データを収集するという特性が、社会調査の根幹にあるという認識は、広く共有されていると思われる。たとえば自らの研究履歴のなかで「社会調査」に該当するものを探するとき、あるいは大学で社会調査実習などの授業を担当するとき、この定義は相当な重みをもっている。

さて、社会調査と言説分析は、いかなる関係にある(べきな)のか。言説分析は、さまざまな社会的・歴史的コンテクストのもとで人びとが語る言葉の群れを固有の分析対象に据えるが、その営みは、社会調査の現地性や直接性という要請とどう対応しているのだろうか。もちろん言説分析が対象とする言葉——その多くは会話やインタビューのスク립ト、雑誌や新聞の記事、学術論文、一般の

書籍やパンフレット、会議録、テレビ番組、インターネット上の記録などである——は、現地性をもたない、二次的なデータにすぎず、それを分析したところで社会調査とはいえない、という立場もあるだろう。これは私自身、言説の研究に身を投じて以来の悩みでもあった。たしかに質問紙調査に基づく統計的調査やインタビュー、参与観察などもやってみると面白いし、それらこそ社会調査の基礎だという実感は理解できるのである。

しかしそれでも言説分析には、他の調査法ではなかなか気づかないような、社会的現実には到達するためのアイデアや示唆が詰まっていると私は思う。さらにいえば、言説分析を社会調査の一手法として鍛え上げていくことは、社会調査そのものの可能性を拡げる可能性があると感じるのだ。この感覚をうまく言語化することはいまだに難しい。だが私が言説分析のどこに魅力を感じるかを、おらずと論じてみたい。

2 言説分析を行うきっかけ ——言説の定型性とその変容

ところで言説分析という呼称には、さまざまな難しさが入り混じる。身近なところでは、学生や院生が卒業論文や修士論文の調査手法として「言説分析を行いたい」と相談してくる場合、しばしば雑誌や新聞のデータベースから記事を検索して、大量の文字列を羅列する作業だけを想定していることが多い（近年の電子的データベースの発達がそれに拍車をかけた）。だが言説分析が何をやろうとしているのか、そして他の調査手法とくらべたとき、言説分析に固有の利点や弱点は何かといった点を理解しないまま、とりあえず資料を集めるという方針で臨んでしまうと、結局、大量の文字列を前に狼狽し、言説を解釈したり、

分析する段階に至らずに終わることになる。

実は私も、見込みのないまま言説収集に精を出したり、データベース化された文字列の山に埋もれて失敗した経験が、何度かある。だから現在は、「言説分析をやりたい」と希望する学生には、「その前にきちんと質問紙調査やインタビュー調査の技法を修得しなさい」とアドバイスすることになっている。というのも質問紙調査のように、調査者が質問文を作成して、それに対する調査対象者のさまざまな反応を得るという経験や、インタビューに臨んで、調査対象者が語りたいことと調査者が聞き出したいことのせめぎあいを経験するという過程なしには、言説分析のねらいを理解することはかえって難しいと思われるからだ。

私の場合、言説分析に取り組んでみようという気になるのは、たとえば誰かと雑談したり、インタビューをしているとき、または雑誌や新聞の記事を読んでいるときである。「こういう物言いは、どこかで聞いたことがある」とか、「人は生まれも育ちも異なり、さまざまに異なる人生を歩んできたはずだが、なぜ、かくも同じような語り方をしてしまうのだろうか？」という感覚に襲われることがある。つまり人びとが語る言葉の内容や語り方に、ある種の共通性や定型性が存在すると感じてしまうのである。

このような経験は、多かれ少なかれ誰にでもあるはずだ。私の場合、大学院生の頃にセクシュアリティの社会学的研究を志して性に関する観念や知識の変遷を調べはじめたとき、こうした経験を何度もした。たとえばオナニーや同性愛や売買春や婚前性交などの性的な事柄に対する医学的な知識・道徳的な観念、たとえば性を本能と考えるか人格の一部と考えるかといった「常識」について語る言説に

は、しばしば定型的な表現が含まれる。そして、そうした定型的な言説は、時代を経るごとに、大きく変化することがある。こうした言説の定型性が、どのように生じて変化していったのか、また、なぜそうした変化が生じたのかが探求すべき課題となった。それは、残念ながら質問紙調査やインタビューなどの既存の社会調査では解明しにくい課題であった。そのときはじめて言説分析という手法が視野に入ってきたのである。

むろん既存の量的調査やインタビュー調査のなかで、言説の定型性が意識されてこなかったわけではない。たとえば質問紙調査で、人びとが語る言葉の内容を「態度」や「意識」として再構成し、質問文を作って尺度化する作業にも、ある程度、言説の定型性やステレオタイプ性に関する着目が含まれる。ただし量的調査が人びとの意識や態度を操作化・尺度化するときには、人びとの具体的な語りとそれが生み出される状況との関わりとは切断され、見失われる。さらにはインタビュー調査、とりわけ対話的構築主義を標榜するライフストーリー研究では、全体社会で一般化されている支配的な語りを「ドミナント・ストーリー」、特定のコミュニティに共有される語りを「モデル・ストーリー」と呼ぶが（桜井，2002）、これらの概念化には、定型的な語り^{ストーリー}が全体社会や下位コミュニティのなかで広く共有されているという前提がある。ただライフストーリー研究の場合、人びとの具体的な語り^{ストーリー}と、それが産出される場や関係のありかたに着目する傾向が強い。だがここで、（a）ある語り^{ストーリー}がいつから、どのような経緯で、競合する語り^{ストーリー}を駆逐して「ドミナント」になりえたのか、さらには（b）特定のコミュニティや組織で共有される語り^{ストーリー}が維持・再生産されるメカニズムは何

か、といった問いにつなげていくことはできないだろうか。私にとって言説分析は、そのような要請に応えうる数少ない技法に思われたのである。

3 言説分析の諸流派 (discourse analyses)

ただし言説分析には、さまざまな流派が存在する。現在の英米の社会調査の教科書では、言説分析は、ナイジェル・ギルバートとマイケル・マルケイ、ジョナサン・ポッター、マーガレット・ウィザレルらが開発したディスコース心理学のことを指していることが多い。この場合、会話分析とディスコース分析（discourse analysis, DA）はしばしば対置・並列される。そして会話分析が分析素材としての会話（talk）に重点を置くのに対し、ディスコース分析は、インタビューのスクリプトやニュース記事など、より柔軟にさまざまなテキストを分析に用いると評される（Bryman ed., 2008: 499）。

ブライマンの説明を借りると、DAは哲学者ミシェル・フーコーの洞察に学んでいる。フーコーにとって言説とは、「対象に関連した特定の言語的カテゴリーやその対象を記述する方法が、私たちがその対象を理解する方法を形成すること」を示す言葉であり、言説はその対象自体を構成する。たとえば精神疾患に関する言説は、精神疾患者の特徴、その病気の特徴、彼らの処遇のされ方、誰が彼らを処遇する資格があるかなどの観念を構成する。それゆえ言説は、精神疾患を扱う治療者の権力や治療体制を正当化する枠組みにもなる。言説は単なる言語以上のものであり、社会的現実を構成する要素となるがゆえに、DAはそこに関心を向けるという。

この説明は間違っていない。ただ言説が

対象や現実を構成し、ときには権力を正当化する装置となるという指摘は、少なくとも社会学者にとってはお馴染みであろう。実際ブライマンはこれに続けて、「フーコーのやり方は言説の研究に大まかな（broad-brush）歴史的アプローチを取るものであった。DAは、CAの洞察を統合しながら、フーコーのやり方よりもきめの細かい（fine-grained）分析を会話やテキストに施すことになった」と評している（Bryman ed., 2008: 499）。つまりDAは、フーコー流の言説分析（と彼らが呼ぶもの）とは一線を画する形で、自らを特徴づけているわけである。それは、ゆえなきことではない。

たとえば現時点でDAの数少ない教科書である鈴木（2007）では、科学者による実験の説明の仕方、移民についてのインタビュー、英国BBCでのダイアナ妃とインタビュアとの応答、英国保守党議員による演説などの事例が紹介されている。そこでは、分量的には少量の会話や書かれた文書を扱いながらDA固有の概念装置が使われる。たとえば解釈レパトリー（経験主義的レパトリー／偶然的レパトリー）、事実を構成する言説資源としての「利害関係予防」「カテゴリー付与」「外部性」などといった概念である。こうした概念を用いながらDAは、人びとが会話や書くことを通して行っていること（言説実践）をテキストに則しながら、緻密に読みこなしていく。つまりDAは、テキストの分析に内在することによって、社会調査としての「現場性」「直接性」を担保しようとする（その意味では、会話分析に近接していく）。

おそらくDAは今後、質的調査の一手法として、社会心理学や会話分析の研究者を巻き込みながら、着実に広がっていくだろう。社会学でも佐藤（2006）のような優れた仕事

が生まれている。ただ私は言説分析を、フーコーにたちかえりつつ、歴史社会学の一手法として確立させたいと願っている。それは結局、「人びとは多様である。にもかかわらず似たようなことを語ってしまうのはなぜか」、「似たような語りが、ある時期に急に頻繁に登場し、次第に消えていくのはなぜか」という初発の問題関心にこだわりたいからにほかならない。

4 言説の歴史（言説史）を書くために ——構築主義の再構築

ここで言説分析のねらいを、フーコー自身の言葉を借りて再確認しておこう。

「私が行おうとしたのは言説の歴史なのです。（中略）私が問おうとしているのは、コードの問題ではなく、出来事の問題であり、言説の存在の法則、つまり諸々の言表を前にして、他の言表ではなく、まさしくそれらの言表を可能にしたものとは何かを問うことであるのです。それはまた、そうした言表が一回かぎり出現したことの諸条件、あるいはまた、言説的であれそうでないにせよ、先行してあるいは同時に起った他の諸々の出来事との、それらの言表の相関関係を問うことでもあります」（Foucault, 1968: 訳 80-81 頁）。

この引用にあるとおり、言説分析の中核的な問いは、「諸々の言表を前にして、他の言表ではなく、まさしくそれらの言表を可能にしたものとは何か」を問うことである。そしてフーコーは、①言説内的な依存関係（おなじ1つの形成に属する、諸対象間、諸操作間、諸概念間の依存関係）、②言説間的な依存関係（相異なる言説形成体間の依存関係）、③言説外的な依存関係（言説の変化と言説のなか以外で起こった変化との依存関係）という3つの観点からの考察を提唱していた（Foucault, 1968:

訳 79 頁)。

実は、③のような問題関心を先鋭化していくと、ファン・ダイク、ノーマン・フェアクラウ、ピリグ・ウィリッグらが主導する批判的言説分析 (CDA) に近づいていく。すなわち言説と言説外部の権力や制度との関連を問う分析である。このときは「誰が、どのような立場から、どのような利害関心やイデオロギーに基づいて語っているのか」が中心的に問われることになる。

しかし私は、特に②の問題関心にこだわることで、言説の同型性やステレオタイプ性により肉薄できるようになると考えたい。この問題意識のもとでは、「誰が語るのか？」よりも、「誰が語っても、似たような語りになるのはなぜか？」という問いが重要となるからだ。実際フーコーは、権力や利害が知を産み出すという側面以上に、知が権力を作動させる歴史的条件になることを強調していた (赤川, 2005)。フーコー自身はやがて生権力の分析、すなわち「社会 (近代西洋社会) はどのようにして十八世紀以来、『人間はヒトという種を構成する』という基本的な事実をあらためて考慮に入れたのか」 (Foucault, 2004: 訳 3 頁) という歴史の探究へと赴いていた。大まかにいってそれは、権力に関する 3 つのメカニズム、法、規律、安全というメカニズムの重なり合いを描き出す試みであった。もっともフーコーの分析は西洋近代、特に 18 世紀以降のヨーロッパの文脈に強く根ざしたものであり、そのまま時代や地域が異なる社会の分析にそのまま適用することには留保が必要である。フーコーの衣鉢を継ぐ者にとって、生権力という問題系へのこだわりは重要だが、私たち社会調査者は、言説分析に固有の利点を、それぞれの研究現場に則して活かしていけばよいだろう。

私にとって、それは「言説の歴史を書く」作業である。つまり特定の内容や語り方をふくんだ言説が、どのように生産・流通・消費され、変容していくか、また、その変容を促した社会的・政治的・歴史的条件は何か。このような問いを解くための道具として、言説分析を活用したいのである。あえて DA の概念に引きつけていえば、会話や書かれた文書に現れる解釈レパトリーが、他の時空間における解釈レパトリーとどのように接続／切断してきたかの歴史を描き出したいわけである。フーコーの言葉を使えば「言説間的な依存関係」に着目する言説分析といえようか。私なりに言い換えると、私たちの眼前に存在する定型的な言説が産み出される文脈を捉え、それらの言説が他の言説と接続したり切断するさまを捉え、それらの総体としての言説空間の変容を諸々の言説の力学が産み出す軌跡として描き出すこと、これが言説史の営みなのだ、といっておきたい。

このような意味での言説史をより具体的に展開するには、社会問題の構築主義アプローチとの理論的連携が有効だと思われる。

まず特定の語りや知識が、政府機関、企業、運動団体、マスメディア、地域など特定の集団や機関のもとで組織的に産み出される文脈を捉える必要がある。たとえばジェイバー・グブリアムとジェイムズ・ホルスタインは、誰が家族と呼ばれるべきか、家族とはどんな関係を指すか、誰が家族に責任を負うべきかといった解釈が地域精神保健施設、検察局、精神科といった組織に応じて異なっていること、すなわち家族に関する言説や用法が「組織に埋め込まれている」ことを指摘した (Gubrium and Holstein, 1990: 235)。ここでの「組織」は公的機関や専門家集団にかぎらず、自助グループ、問題解決をめざす活動家、

マスメディアなど、さまざまな団体や業界を含む。そして組織に所属したり、関係をもつことで、定型的な言説が産み出されていく。ときに組織間で言説と言説が対立し合う場合もある。こうした様相を丁寧に描き出すこと。これが言説史に与えられた第一の課題である。

次に、さまざまな言説が、特定の言説空間のなかでどのように配置され、他の言説とどのような関係にあるか。そして、どのような議論の構図のもとで、どのような言説が支配的になったり周縁化されるのかを描き出す必要がある。あるいは組織的な言説同士が対立したり、調停したり、重なり合ったりするさまを描き出すのである。これが、言説史の第二の課題である。とりわけ公共的な議論のアリーナ（国会、政府の審議会、マスメディア、科学的な議論の場など）は、時空間が限定されている。国会での審議時間や、テレビでの報道時間、新聞や雑誌の報道スペースには限りがある。政府が実行する政策のリストには優先順位がある。それゆえ問題の解決を求めるクレイムは、限られた時空間のなかで競合しあう。そのことが言説の語り方にも影響を与えていく。たとえばジョエル・ベストは、さまざまなクレイムが、時空間が限定された「社会問題の市場」のなかで、一般の人びとの興味関心を引きつけるべく競合し合っており、それゆえ典型的な事例を強調したり、問題を新奇な言葉で名づけ直したり、統計を使って問題の重大さを誇張しがちであると論じている（Best, 2008: 45）。時空間という物理的な制約が、言説の語り方に影響するという指摘は興味深い。このような問題関心を洗練していくことで、ある特定の言説が特定の言説空間に占める位置を正確に測定し、その言説の特権性や通俗性に関する評価をより深く行えるようになるだろう。これも言説分析の効用

の1つである。

さらに同型的な言説は、特定のアリーナにとどまらず、さまざまなアリーナを経由して広がっていく。専門的な医学の領域で論じられていたことが、通俗的な雑誌や教育の世界に伝播したり、マスメディアで報道されたことが政策形成につながることもある。こうした言説やクレイム申し立ての連鎖を追尾しながら、言説の変容を解明する理論を構築すること。これが言説史の第三の課題であり、言説史の面白みをもっとも現れるところだと思われる。

もっともそれは、ことさらに新しい営みではない。そもそも社会問題の構築主義アプローチの創始者であるジョン・キツセとマルコム・スペクターは、「社会問題は、なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレイムを申し立てる個人やグループの活動である」とする有名な定義の直後に、「社会問題の理論の中心課題は、クレイム申し立て活動とそれに反応する活動の発生や性質、持続について説明することである」と表明していた（Spector and Kitsuse, 1977: 訳 119 頁）。その原点に立ち返るだけである。たしかに「クレイム申し立て活動とそれに反応する活動の発生や性質、持続」について説明するやり方は、どのようなアリーナの、どんな言説を、どういう枠組みにしたがって分析するかに応じて、異なりうる。構築主義をめぐる厳格派とコンテキスト派の対立は、認識論的にはともかく、具体的な論述ではこの水準における違いとして現れていた。もっとも私は、いたずらに言説外的な要因（人口変動、産業構造の変動、犯罪発生率など）をもち出すことなく、言説の連鎖を丹念に追尾することで、言説同士が交錯し、拮抗する力学的な作用の結果として、言説自体が変容していくと考えることを好む

(赤川, 1999)。

このような意味での構築主義のプログラムに則った具体的な研究事例は、日本ではまだ多くない(中河, 1999; 赤川, 1995; 田間, 1999; 石田, 2002 など)。いろんな原因が考えられるのだが、たしかに構築主義のプログラムに則って言説史を書いてみようとする、公刊資料の内容分析だけでなく、インタビューやマスメディアの内容分析など、やるべきことが多岐にわたる。しかも労が多い割に、報われる結論を得ることが難しいと感じることもないわけではない。

ただ言説史の営みは、CA や DA のように、従来の社会調査の技法と異なる特殊な技法を必要としない。クレイム申し立ては議事録や訴訟、白書などの公的文書、パンフレット、CM、マスメディアなどさまざまな場所で行われるので、基本的に公刊資料を収集する手続きと変わりはない。組織的に埋め込まれた知識や、公的なクレイムになりにくい語りを抽出するには、参与観察やインタビューが必要となる場合もある。さらに特定のアリーナにおける、ある言説のメジャー度を測定するために量的な内容分析の手法が必要となるかもしれない。ときには歴史家のように古文書や古新聞、古雑誌を繙く場面があるかもしれない。

結局のところ、言説史を言説史たらしめるのは、さまざまな質的調査の方法を駆使しながら(方法的雑種性に耐えながら)、言説の配置、対立、変容ときまじめにつきあい、事実の歴史ではなく言説の歴史を書こうとする志なのであろう。いまのところは、そう思う。こうした営みが社会調査の1つの手法として、多くの人がとに継受されていくことを願ってやまないが、まずは私自身がこの作業に没頭してみようと思う。

注

- ・1 言説分析を社会調査の一手法として紹介しているものに、盛山(2004)がある。

文献

- 赤川学, 1995, 「売買春をめぐる言説のレトリック分析」江原由美子編『性の商品化』勁草書房。
- , 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房。
- , 2005, 「言説の歴史を書く」盛山和夫ほか編『経験知の現在——〈社会〉への知／現代社会学の理論と方法(下)』勁草書房。
- Best, Joel, 2008, *Social Problems*, New York: Norton.
- Bryman, Alan ed., 2008, *Social Research Methods*, 3rd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Foucault, Michel, 1968, "Réponse à une Question," *Esprit*, 371: 850-74. (石田英敬訳, 1999, 「エスプリ誌 質問への回答」『ミシェル・フーコー思考集成Ⅲ』筑摩書房, 70-99.)
- , 2004, *Sécurité, Territoire, Population: Cours au Collège de France 1977-1978*, Seuil. (高桑和己訳, 2007, 『安全・領土・人口 コレージュ・ド・フランス講義 1977-78 年度』筑摩書房。)
- Gubrium, J. F. and J. A. Holstein, 1990, *What is Family?*, Mountain View, CA: Mayfield. (中河伸俊ほか訳, 1997, 『家族とは何か——その言説と現実』新曜社。)
- 石田仁, 2002, 「甦るブルーボーイ裁判の〈精神〉」『法とセクシュアリティ』1: 85-117, 性的マイノリティと法研究会。
- 中河伸俊, 1999, 『社会問題の社会学』世界思想社。
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学』せりか書房。
- 佐藤哲彦, 2006, 『覚醒剤の社会史』東信堂。
- 盛山和夫, 2004, 『社会調査法入門』有斐閣。
- 『社会福祉学習双書』編集委員会編, 2009, 『社会福祉学習双書 2009 第12巻・社会学(社会理論と社会システム／社会調査の基礎)』全国社会福祉協議会。
- Spector, M. and J. I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings. (村上直之ほか訳, 1990, 『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて』マルジュ社。)
- 鈴木聡志, 2007, 『会話分析・ディスコース分析』新曜社。
- 田間泰子, 1999, 「逸脱する母親たち」宝月誠編『講座社会学 10 逸脱』東京大学出版会。
- 安田三郎・原純輔, 1982, 『社会調査ハンドブック(第3版)』有斐閣。